



演劇的手法を取り入れた授業に係る研修会より

平成29年度から全市展開しているコミュニケーション教育も今年度で8年目を迎えました。改めての説明となりますが、コミュニケーション教育の目的は「性別や年代を越えて対等な関係の中で自分を主張し、他者を理解できる基礎的なコミュニケーション能力の育成を目指す」ことです。

本市は2つの取組で「コミュニケーション教育」を展開しています。

1つ目の取組は、全ての学年、全ての授業でコミュニケーション能力を高める取組です。市が独自で作成した「コミュニケーション能力の視点とその留意点」や「活動例一覧表」を授業に活かし、4つの視点を大切にしながら授業改善を図っています。

2つ目の取組は、小学校6年と中学校1年で行う「演劇的手法を取り入れた授業」です。学期に1回、それぞれ2時間から3時間、学級担任が指導案をもとに授業を行います。演劇を創る過程を通して、他者の意見を聴き、自分の意見も主張してすり合わせながら「合意形成」を図るプログラムとなっています。

演劇「を」学ぶのではなく、演劇「で」学びます。

★年に9回、プロのファシリテーターに実際授業をしていただき、先生方の研修の場と
しています。今回は、1学期に行われた研修会の内容を紹介します！

【意見交流会で出た質問】 『コミュニケーションゲーム』(小6)

① 寄せ鍋ゲームでもめているチームへの対応について

➡失敗する経験を大切にします。

指導者は、その原因を観察する役割です。

② 合意形成のプロセスについて

➡例えば、寄せ鍋ゲーム。

少人数から多人数へのグループになったときなど変化がより見られます。

③ 子どもの授業態度について

➡注意することはしません。本プログラムは、実際担当の先生が行いますが、いつもと違う関係性で行います。その部分を明確化しておくことが大切です。最も大切なことは、普段と違う動きをする点について、観察することです。

④ 構成的グループエンカウンターとはどう違うのか

➡演劇は手段。発表の結果(クオリティ)ではなく、プロセスに注視することです。

複数の他者と関わったり、他者の意見を尊重することを大切にします。

⑤ プログラムへの参加が後ろ向きである子への対応について

➡本プログラムは、一歩踏み出せる環境ですが、参加しない子の意思を尊重します。大切なことは、その子を観察することを怠らないことです。入りたいタイミングが見受けられれば、対応します。



【意見交流会で出た質問】 『ゼスチャーで場面づくり』(中1)

- ① 最適なグループの人数について
➡6～7人。理由は、いろいろな役割ができたり、意見が言えるからです。
- ② 主体性を引き出すポイントについて。
➡「嘘をつかない」「素直に」意味付け、価値づけすることが大切です。
- ③ お題を選ぶ基準は。
➡簡単にイメージしやすいワード。加えて、動きが付けやすいものが良いです。
- ④ 場面緘黙の生徒への対応は。
➡観察すること。否定しない…無理やり参加させない。
個性があったり特性があったりすること…コミュニケーションの効果が
高い。意識や関係性が見えるため、よく観察することです。
- ⑤ ウォーミングアップは。
➡バースデーラインも可です。大人数の時は、じゃんけんゲームでなくても
よいです。観察することが大切です。担当の先生が行う時もいつもと違う雰
囲気を出せたらよいです。
- ⑥ 主体性を大切にすることについて
➡途中で終わっても手助けしません。この時間は失敗させても良いです。事
実を意識化、言語化してフィードバックしてやることです。次に成功するた
めの課題と捉えることです。
- ⑦ クラスの人数が少人数の場合は。2グループでできるか。
➡できます。見られる経験をすることが大切です。